

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03238

研究課題名（和文）日本統治期の朝鮮・満州における民間地図と画像資料に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文）Historical Geographical Study of Civilian Maps and Imagery Documents in Korea and Manchuria under Japanese Rule

研究代表者

中西 僚太郎（NAKANISHI, Ryotaro）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：70202215

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本統治下にあった近代期の朝鮮・満州を対象として、日本人が民間で作成した都市や観光地、広域空間の平面図、鳥瞰図などの情報を収集し、データベースを作成した上で、それらの資料を活用して各地域の商工業や観光の実態、表現された地域イメージを検討した。結果として、朝鮮半島を描いた吉田初三郎の鳥瞰図を多数見出すことができ、そこには当時の日本人の朝鮮に対する地域イメージが投影されていること、満州の都市平面図の発行は、1900年代以降、大連、奉天、長春、哈爾濱という順に、日本人の満州への商工者の進出、観光客の増加に対応して盛んになる傾向があることなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、歴史学をはじめとする人文社会科学分野の研究者のみならず、一般の人々の間でも、近代日本の植民地に対する関心が高まっており、なかでも満州や朝鮮への関心はとくに高い。本研究における地図資料の収集、データベース化は、近代期の満州・朝鮮に関して地理的な基礎的情報を提供するという点で意義がある。また、地図資料を基に当時の商工業や観光の実態、地域イメージを明らかにするという、歴史研究の新たな手法を提示した点でも意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, I first created a database of information such as plans and bird's-eye views of cities, tourist attractions, and wide-area spaces created privately by Japanese people in Korea and Manchuria under Japanese rule. Next, I utilized those materials to examine the actual conditions of commerce, industry, and tourism in each region, as well as the expressed regional image. As a result, many bird's-eye views by Hatsusaburo Yoshida depicting the Korean Peninsula were found, and it was revealed that the image of Korea as a region by Japanese people at that time was projected onto them. The publication of city plans of Manchuria had become evident since the 1900s, with Dalian, Mukden, Changchun, and Harbin, in that order, tending to increase in response to the expansion of Japanese commerce and industry into Manchuria and the increase in tourists.

研究分野：歴史地理学

キーワード：民間地図 市街地図 鳥瞰図 案内書 朝鮮半島 満州 大連 哈爾濱

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代社会では、商工業やツーリズムの発展と呼応して、絵入りの平面図や鳥瞰図、写真帳などの地域情報を視覚的に表現したメディアが顕著に発達した。このような視覚メディアを活用した歴史研究は近年注目されており、その研究の進展が求められている。

(2) 近代期の日本植民地研究は、戦後長らく低調であったが、近年においては活発に研究が行われている。そのなかでも、日本植民地期の満州と朝鮮については、その社会経済的な影響の大きさから、近代日本を考える際に重要な研究対象と考えられており、近年はその研究の進展が顕著である。

2. 研究の目的

(1) 本研究では第一に、近代に民間で作製された都市や観光地、広域空間の平面図、鳥瞰図、写真帳、絵はがき、案内書を日本統治下の朝鮮・満州を対象として情報収集し、データベースを作成する。それによって新たな地域情報の蓄積を図る。

(2) 第二に、同時代の地誌や関連資料を参考にしてこれらの資料を読み解き、朝鮮・満州における商工業の実態とツーリズムのあり方、表現された地域イメージを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 資料の調査方法としては、一次資料(原資料)に関しては、図書館、資料館、博物館にて、資料調査(書誌事項の記録、撮影・コピーによる画像データ収集)を行うとともに、古書店を通じて可能な限り購入する。二次資料(複製版や集成本)についても、図書館等で調査すると同時に入手可能なものは購入する。また研究対象とする資料類は、図書館や個人のウェブサイトでの公開も進んでいるため、その情報についても収集に努める。

(2) 資料の収集状況や既往の研究をふまえて分析対象とする都市や観光地を選定する。そして、資料調査で収集した民間地図と画像資料の記載・掲載内容と、当該地域に関する地誌や旅行記などの関連資料を参考にして表現された内容を読み説く。

4. 研究成果

(1) 地図データベースは、朝鮮に関しては、朝鮮半島広域、京城、釜山、仁川、平壤、金剛山の平面図と鳥瞰図、満州に関しては、満州広域、大連、奉天、長春(新京)、哈爾濱、営口の平面図について作成した。結果として、初版と再版を合わせて、点数が多いものを示すと、平面図は朝鮮半島広域が約 170 点、京城が約 90 点、釜山と平壤が約 20 点見出すことができ、鳥瞰図は朝鮮半島広域が約 30 点、京城が約 10 点、金剛山が約 20 点見出すことができた。満州の平面図については、満州広域が約 300 点、大連、長春(新京)、哈爾濱が約 30 点、奉天が約 40 点、見出すことができた。

(2) 鳥瞰図については、近代日本を代表する鳥瞰図絵師である吉田初三郎が描いた朝鮮半島のものを数多く見出せたので、その分析を行った。初三郎の鳥瞰図が収められた朝鮮半島を描いた鳥瞰図刊本は全部で 35 点あるが、同じ鳥瞰図が収められている場合もあるので、鳥瞰図そのものは 21 種類である。鳥瞰図に描かれた地域は、朝鮮半島全体(十三道)と、京城、平壤、釜山などの主要都市と金剛山、松濤園(海水浴場)、温陽温泉などである。発行年をみると、ほとんどが 1929 年である。これは同年に京城で朝鮮博覧会が開催されたことと深く関係しており、朝鮮博覧会を機に日本人に朝鮮を宣伝すべく、朝鮮総督府や総督府鉄道局、各地の道府庁が一体になって初三郎に鳥瞰図作成を依頼したためと考えられる。これらの鳥瞰図のなかでも、朝鮮半島全体を描いた「朝鮮大図絵」はその地域スケールの大きさからもっとも注目される。

「朝鮮大図絵」の記載内容を見ると、山や河川などの自然物は主なものが記されており、人工物は、駅名と都邑名が網羅的に記されているほか、主要な寺の名称はほぼ記されている。温泉地は内地人の観光客を想定して詳しく書かれており、当時までに開発が進み、よく知られていた温泉は限なく記載されている。旅館・ホテルは、朝鮮総督府鉄道直営もしくは委任経営の旅館・ホテルのみ名称が記されている。記念碑・古跡に関しては名称が描かれるものは限定的で少なく偏っている。慶州・扶余の古跡・陵墓の記載はわずかながら認められるが、朝鮮王朝の陵墓についてはまったく記されていない。産業施設に関しては、大規模な総督府直営の塩田や水力発電所の名称が記される程度である。記載内容からみると、「朝鮮大図絵」は、主要な山河と鉄道網、駅・都邑を系統的に表現したうえで、寺と温泉地については詳しく、名所や近代建造物はムラのあるかたちで表現したものと見える。このような「朝鮮大図絵」の内容は、当時の日本人の植民地朝鮮に対する関心や価値観(地域イメージ)を反映したものであり、楽浪古墳や慶州・扶余の古跡・陵墓への関心は古代への追慕、朝鮮王陵への関心の低さは近世の否定、近代建造物への関心は、日本の植民地となった近代の賛美を表現したものと考えられる。

(3) 日本人による満州の市街地図の発行状況を年次別にみると、おおそ大連は 1900 年代以降、奉天は 1920 年代以降、長春（新京）・哈爾濱は 1930 年代以降にその発行数が多くなるという傾向を見て取ることができる（図 1）。これは日本の満州への支配力拡大とともに、満州南部から北部にかけて、日本人商工業者の活動が盛んとなり、日本人観光客が増えていったことと対応している。地図の発行者に関しては、大連では 1910 年代まで内地（東京、大阪、下関など）の人物・書店が中心であったが、1920 年代以降は、大連の人物・書店（大阪屋號書店など）が中心となること、奉天・長春（新京）・哈爾濱に関しては、1920 年代以降に発行が多くなることもあり、その発行者は地元の人物・書店が中心であったことなどが指摘できる。

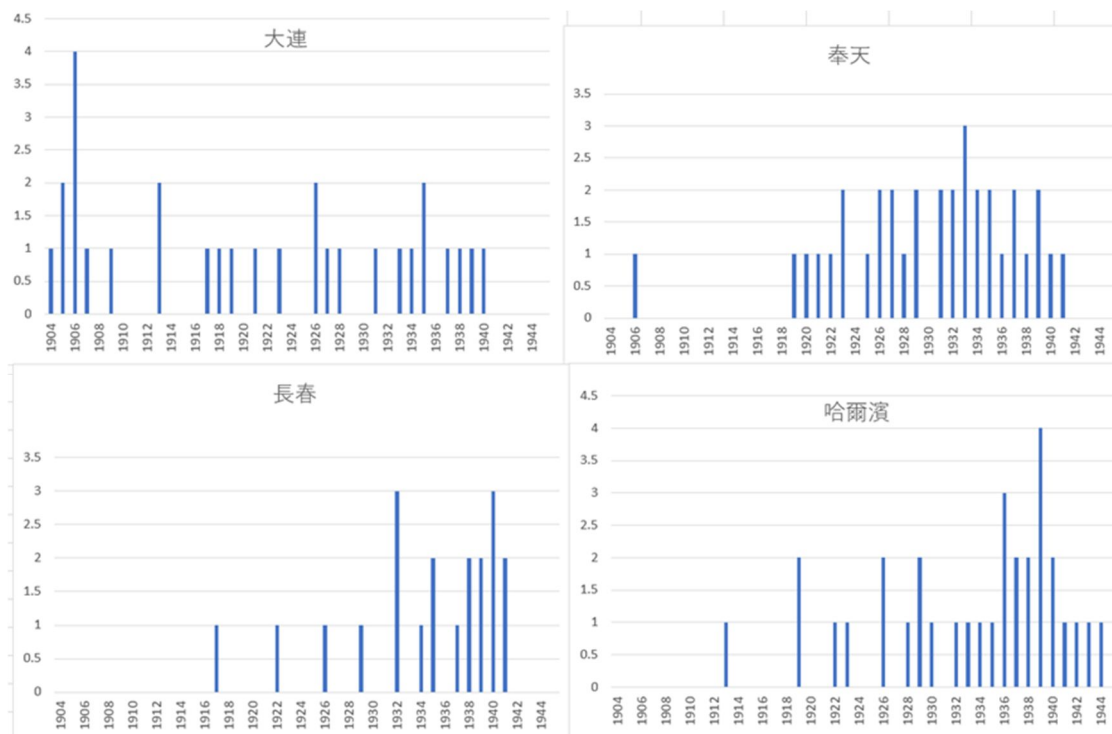


図 1 大連・奉天・長春・哈爾濱の市街地図の発行状況（縦軸は点数、横軸は年次）

(4) 1920 年代の大連に関して、紳士録に掲載されている日本人の居住地を市街地図を活用して検討した。その結果、社会階層の違いによって、おおその棲み分けが行われていたことが明らかとなった。1927 年発行の『満洲紳士縉商録』に掲載されている大連在住の日本人は 427 人であり、その学歴から、高等学校・専門学校卒以上の高学歴者とそうでない低学歴者にわけることができる。高学歴者は満鉄職員をはじめとして、官吏や医師、弁護士、商社員などであり、低学歴者は商店主をはじめとする自営業者が中心である。高学歴者が主に居住していたのは、旧市街（ロシア統治時代に整備された市街地）、南山麓、星ヶ浦（郊外の海浜住宅地）であり、低学歴者が主に居住していたのは、大連中心部の商業地区と、大連市西部の新たな市街地に位置する沙河口と聖徳街などであった。

(5) 哈爾濱に関しては、市街地図に加えて案内書の発行状況も検討した結果、次のことが判明した。両者ともに 1910 年代に先行して少数のものが発行され、1920 年代には継続的に発行されるようになる。その頃の内容は案内書、市街地図ともに商工案内を主としたものである。それが 1932 年の満州国成立以降は、ともに数多くのものが発行されるようになり、内容は観光案内を主としたものが増えていく。しかし、1939 年を発行のピークとして、その後は減少し、1945 年の日本の敗戦へと至る、という傾向である。これらは日本人の哈爾濱での活動の変化と対応しており、1900 年代の日本人居住の始まり、1910 年代の在留日本人数の増加と 1920 年代の持続、1930 年代の在留日本人と旅行者の急増を反映したものと見える。

(6) 哈爾濱の案内書と市街地を活用して 1910 年代の哈爾濱の日本人商工業者の特性を検討した結果、1910 年代の哈爾濱の日本人居住者の職業は、官吏や貿易商、雑貨商、酌婦が多いが、その他には薬種商・売薬商が比較的多いこと、薬種商・売薬商は中国人街（傅家甸）に居住する者が多いことが明らかとなった。この中国人街に居住していた薬種商・売薬商は、中国人を顧客として、薬のほかにアヘンも販売していたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中西僚太郎	4. 巻 48
2. 論文標題 日本植民地期の大連市街地図について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史人類	6. 最初と最後の頁 96-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西僚太郎	4. 巻 47
2. 論文標題 近代の鳥瞰図に描かれた朝鮮半島 吉田初三郎「朝鮮大図絵」の文字情報の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史人類	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西僚太郎	4. 巻 50
2. 論文標題 20世紀前半における日本人作成のハルピン案内書と市街地図	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史人類	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中西僚太郎
2. 発表標題 日本統治下の満洲における民間作製の都市図について
3. 学会等名 日本地理学会・近代日本の地域形成研究グループ集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西僚太郎
2. 発表標題 鳥瞰図絵師・松井天山の画業と画風
3. 学会等名 栃木県歴史文化研究会第29回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakanishi Ryotaro
2. 発表標題 Distribution of the Dwellings on Japanese Businessmen and Elites in Dalian in the 1920s
3. 学会等名 17th International Conference of Historical Geographers 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中西僚太郎
2. 発表標題 近代期朝鮮半島に関する鳥瞰図
3. 学会等名 文化歴史地理学会（韓国）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中西僚太郎
2. 発表標題 案内書と市街地図からみた1910年代のハルビンにおける日本人商工業者の特性
3. 学会等名 日本地理学会・近代日本の地域形成研究グループ集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------